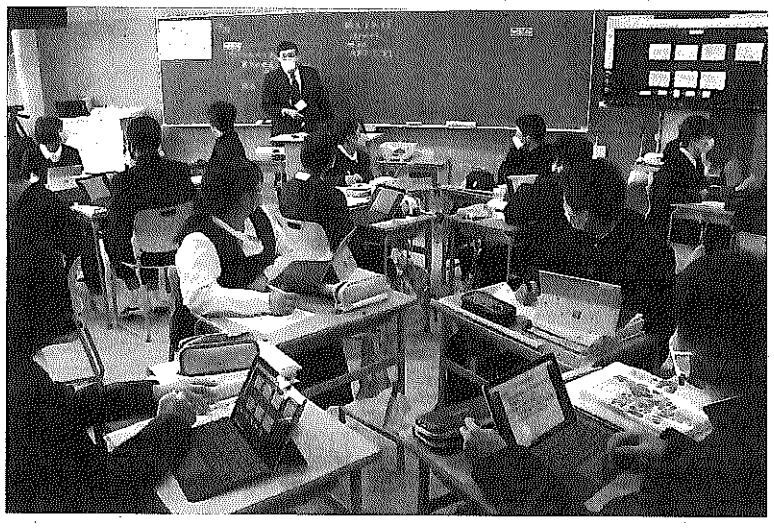
生徒の姿から授業をデザイン

群馬・榛東村立榛東中学校

生徒の学ぶ姿から事実を捉え、授業デザインに取り組んでいる群馬県榛東（しんとう）村立榛東中学校（井口克三校長、生徒378人）。学校独自の「5つの視点」（榛東中スタンダード）を設け、教師一人一人が授業づくりや実践後の振り返りなどに役立てている。「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指し、ICT活用にも取り組む同校は（公財）パナソニック教育財団の特別研究指定校。指導・助言する木原俊行・大阪教育大学教授のコメントと合わせて紹介する。



「対話」と「協働」が深い学びにつながると考え、ICTを効果的に活用し、授業改善に取り組んでいる

表情の変化や姿勢に着目

「主体的・対話的で深い学び」目指す

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、同校では授業研究に取り組んできた。浮かび上がったのは「教師の意図と生徒の学びは必ずしも一致しないのではないか」という仮説。そこで「生徒の学びに授業デザインのヒントがあるのでは」と考え、着目したのは「『対話から学ぶ力』」だった。

令和元年度から村教委の支援の下、タブレット端末を170台導入。GIGAスクール構想に先駆け、ICT環境の充実により、対話の内容を具体的に捉え、学びの事実から分析する授業研究へと転換を図った。例えば、音声スピーカーで授業中の生徒たち（抽出班のグループ）の声を録音し、カメラを使って学びと向き合う姿を撮影。その結果、「対話」と「協働」が深い学びにつながることが次第に分かってきた。

こうしたデータを参考に、各教科等で求められている資質・能力の獲得にどうつながっているかも分析。生徒の表情の変化や姿勢に着目しつつ、学びを多面的に捉えながら授業をデザインしている。

授業中の対話前後で、「生徒の意識」がどう変容したかも検討。自らの授業を「5つの視点」で見直す「振り返りシート」（教師用）も作成し、授業改善の手だての一つとして活用している。

全教科共通のスタンダード設定

授業研究で大切にしているのは「生徒の姿から教師も学ぶ」というスタンス。同校は10月に公開研究会を実施し、全教職員が一丸となって実践してきた校内研修の取り組みなどを中心に報告した。

事例の一つとして、子どもの姿でまとめた「5つの視点」（榛東中スタンダード）を紹介。学習の流れを踏まえ、どの教科でも活用できる授業づくりのスタンダードになっている。例えば「学び合い」の場面。「めあてに迫る対話になっていますか」や「学び合いはガチャガチャ（話し合いにのめり込む）していますか」などの視点を設けている。

こうした「5つの視点」を基に、教師一人一人は教材開発や学習展開の工夫などを行い、授業改善に取り組んでいる。指導案も学校独自の「授業デザインシート」に変更。「生徒の意識」という項目を設け、特に「子どもを見る」という視点を大事にしてきた。

特色ある教材を開発

本年度の課題は、ICTを効果的に使い、単元全体をどのような学びにするかを検討していくこと。その点を考えた上で、1単位時間の授業づくりなどに力を入れて取り組んできた。

10月の公開研究会では、地元の遺跡やそこから発掘された耳飾りの魅力を発信することを探究課題にした総合的な学習の時間（2年）など、生徒の姿から新たな教材開発に取り組んだ特色ある多くの実践が公開された。

参加者を交えた協議が終わると、「生徒はどんな思いで『対話』に臨んでいるのかを検討することが改めて大切と感じた」と述べた研修主任の佐藤博教諭。今後も「生徒の対話・協働する姿を引き出し、思考を深める学びの手だてを追求していきたい」と話している。

榛東中＝☎0279・54・2100

「生徒の意識」重視した授業づくり

木原 俊行
大阪教育大学教授

榛東中学校の教師たちが、「生徒の意識」を大事に授業づくりに取り組んでいる点に注目したい。「授業デザインシート」（指導案）の「本時の展開」欄は「生徒の意識」の記述が多くを占めている。中学校で生徒の反応予測をここまで丁寧に扱った実践事例はあまり多くない。

ICTに関しては、ただ使えば良いというわけではない。例えば、生徒の思考の可視化や振り返りの充実を図り、探究学習のサイクルの進展につなげることができる。

「授業デザインシート」には、望ましいICT活用と探究の学びとの接点も見受けられる。

「生徒の学ぶ姿に教師も学ぶ」。こうした方針の下、教科の壁を越えた学校全体の取り組みになっている点にも着目したい。魅力ある教材開発（各教科等）の工夫などは、ぜひ参考にしたい。